
制服少女

ゴキブリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

制服少女

【Nコード】

N9857B

【作者名】

ゴキブリ

【あらすじ】

制服と共に生活を送る少女達。彼女達の誠に迫る。鬼気せまる文字の羅列をどうぞ。

プロローグ（前書き）

この作品は少々

「グロテスクな表現」

「エロチシズムをくすぐる空間」
が存在します。

どうぞ深いご理解の上お楽しみくださいませ。

プロローグ

奴らは僕に言ったんだ。

「君が君でいたければ、おとなしくそれを渡すんだ。」って。僕が答える間もなくただ、時計は静かに頷いた。

だけど、存在できる喜びは思ってたよりずっといいもので、僕はただただ感謝した。嘘じゃないよ。なんの不自由もなかったし、なんの疑問も持たなかった。だけど、だけど。だからこそ。

これほどまでに人間的でありながら、神秘的な事象がこの世界に存在して許されるものなのか。純粹に僕は悩んだ。あの日の皺寄せがこんな形で迫ってくるなんて思ってもみなかったから。

そして僕は。

答えを出せる自信はこれっぽっちも無かったけど、探してみることにした。

「またね」を奪った盗賊団。風の中の「クロツカーズ」を。

もう匂いすら残っちゃいないのに。

。。。。

どれぐらいの月日が経ったのだろう。うーんと長い間、僕は徘徊し続けてきた。触れてしまえばスーツと解けてしまうモロク美しい日々を。そしてこれだけは言えるのさ。

この物語は僕達の構造の遙か彼方で鳴り響き、あなたはただただ涙する。

そしてこっぴど叫ぶであろう。

「全世界の陰謀だ。制服少女は奇跡の被害者である。」と。

プロローグ（後書き）

次から本編が始まります。
どうぞお楽しみに。

がたんごん。がたんごん。耳障りな地響きに苛立ちながら、僕はじーっと耐えていた。僕が頼んだミルクティーも、ゆらゆら陽炎とにらみ合っている。

もう30分は経ったんじゃないだろうか。彼女は他愛もない話を退廃的に続けている。

「そうそう。このずーんと沈んだ空の下で、一際鮮やかな色をしてるこの物静かなコーヒーが大好きなの。特別じゃないの。似たり寄ったりな味の薄いコーヒーで、いいところなんてひとつもないはずなんだけど。なんだか好きなの。なんだかね。好きなんだよ。ふふっ。」

彼女らしい優しい話し方だ。どんなときでもするする抜けていくような、彼女の言葉。おもむろに掴もうとしても、さらっと僕を笑い、ふっと消えるんだろうなあ。

「そういえば、私がコーヒーを飲み始めたのっていつ頃だったっけ？なんだかずいぶんと昔のような気もするし、2、3回目のような気もする。うん。記憶ってすごく曖昧よ。いろんな形に変化して、いつとも私を困らせるの。」

僕もそう思う。夢の世界は夢のまた夢なのかもしれない。

「そうだなー……。私にとってコーヒーはこんな感じかな。」

おっ。始まる。今日はまだ2回目だ。

「暗くて何にも見えないような部屋を見つけて、物色してるの。そう、私が。特に変わった様子もなければ、違和感のかけらもなくって、もっともつとよく見るためにライトを付けようとする。ポチっとね。でもスイッチを入れてしまえば、誰かに見つかるような気もするの。で、嫌な汗をじわーっと体中から吹き出しながら、バツと後ろを振り返る！」

小柄な少女とは似ても似つかない、いきなりの大声で一瞬彼女は

世界を置いてけぼりにしてしまつたが、当の本人はまったく気にする気配もなかつた（気付いてすらいないのかもしれない・・・）。
というか、僕の方が椅子上5cm強も飛び上がってしまったせいで、みんな彼女より僕に興味を示していた。とても恥ずかしかつたけど、あの子を救えたような気がして、嬉しかつた。えへへへ。

「だつてね、さつき確かめたことなんて、いつさらわれるかわからないよ。別に誰も私のことなんか気にしてないのは知ってるけど。」
「なんだつて！？僕がさらつてやるうか！？んっふー！！」

「我に返るために、ふーっとため息をつけば、もやもやと一緒にさつきまでの自分が別人になつて目の前に現れるの。ライトをつけた覚えはないのに、薄い光の煙をまとつているような感じのもう一人の私。うん。そして、意識と無意識の狭間の私は彼女を罵倒するんだ。たかだか18の小娘が思いつく限りの薄っぺらい言葉を並べて。」

「がたんごとん。がたんごとん。」

「「大人」と名乗る人たちにとつたら、大分と馬鹿馬鹿しく見えるんだろつなあ、なんて考えながら。そんな私もいつ馬鹿にされるかわかつたもんじゃないのに。人間つて勝手だと思わない？」

彼女は例え話が好きだ。僕らが誰かを愛するかのようにな、彼女は例え話と手を繋いで世界の果てまで旅をしているのだ。出発の合図は鼻、だ。

鼻に手をやると、彼女は軽くはにかみ、遠くを見る。まるで自分の考えが馬鹿馬鹿しく突飛で、くだらないが故に誇り高いのだ！とまるでどつかのお偉いさんの政見放送かのように。意気揚々と胸を張る。そしてまた軽く膨らんだその胸はエベレストより気高く、万里の長城より怪奇なのである！

次の瞬間僕はわざと耳を濁し、澄まされるの待つた。そして、そ

れにあわせるかのように彼女もそつと声を張った。

「そう。やがて彼らは、ライトに照らされちゃかなわん、と、あれよあれよと逃げ惑うの。不平不満の波は淵に押し寄せ、波音は静かに、でもどこか激情的に反り返る。未知がそんなに怖いのかな？異常とも言えるその行動は、どこでも見るような1滴が、どこにでもいるような少女の、どこにでもあるような制服にくつついて離れないこと。いや、しがみついて離さないこと。とも言えるかな。そんな彼を見て私は、「困った」顔をするの。」

僕はまだじーっと耐えていた。がたんごとん。がたんごとん。「待つて。別にこれぐらいのことで、誰かに助けてもらいたいなんで思ってる訳じゃないの。誰かがそんな私の顔を覗いて、不滅の連想を繰り広げるのがおもしろいの。すごく。だって制服にシミよナニを想像するの？ほら、私が女子高生でいる為に女子高生は私を装うことで誰かの為になるなんて、素晴らしいと思わない？」

コーヒーショップという名とは似ても似つかない古びた喫茶店の大きすぎるガラスの向こう側は、行き交う人々で溢れていた。平凡な人生に負けた帰り道のおばさんたちや、毎日のように待ち焦がれることを、退屈と感じたくて仕方のないサラリーマン達。

そんなにせかせか歩いて、いったいどこへ行くんだらう？ふと思う。

ゆっくりゆっくり時間はほどけていくだけなのに。

「うん。じゃあ、そろそろ行くね。ありがとう。はあい。ばいばーい」

彼女はおもむろにそれを鞆にしまい、立ち上がった。どうやらもう帰ってしまいうらしい。

ななめ向かい側の僕の席に来てくれないかなー。なんて考えながら、僕は青ざめた春が通り過ぎていくのを肌で感じた。

そして、せかせか歩いているように見えぬよう、注意しながら足

早にトイレに行った。

僕は僕でいたいただけなんだ。怖いわけじゃないんだよ。ただ・・・

・・・。

うまく言えないけど、僕は何かをしなきゃいけない気がするんだ。

このとき僕はまだ知らない。まだ。

なんにも知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9857b/>

制服少女

2010年10月21日23時53分発行